

Ando Satoko Lab. 安藤 智子 研究室



研究テーマ：個性をもって生まれた子どもが、力を発揮できるように育つには？ 子どもを育てる親を支えるには？

● 妊娠期から産後1年までの抑うつとその変化

産後1年まで抑うつが続く人、妊娠中や産後5週の早い時期に抑うつで、産後3か月が抑うつ回復のターニングポイントになることから、妊娠中からのスクリーニングや早期の介入が必要であることが示唆されました。

● 4, 5 歳児の親子相互作用と家族コミュニケーション：親の抑うつと子どもの行動傾向の関連

4, 5 歳児の母子、父子、父母子の相互作用の観察実験で親の子どもへの関わり、家族コミュニケーションの評定を行いました。家族機能は、柔軟・親密群と批判・否定群が見出され、母親の抑うつ・育児負担感・夫婦関係、子どもの多動が侵入性・否定表現群で高く、家族機能と母親のメンタルヘルス、子どもの行動傾向の関係が認められました。

● 「安心感の輪」子育てプログラムの効果とアタッチメント改善メカニズムについて

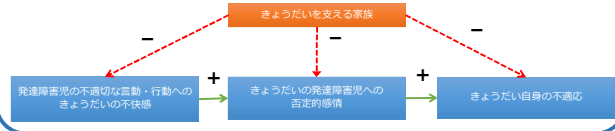
COS-Pプログラム (the Circle of Security Parenting Program) のアタッチメント改善効果について、ランダム化比較試験による介入研究を行っています。また、子どもに関わる支援者や専門家 (里親、乳児院職員、家庭養護施設職員、保育士など) への実践も予定しています。



これまでに指導した研究ピックアップ

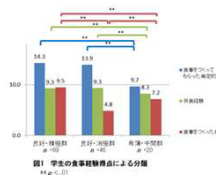
発達障害児の母親ときょうだいが経験する心理的困難に関する研究 (鈴村俊介)

発達障害児を育てている母親と同居するきょうだいには有形無形の様々な苦労があります。彼らが経験している困難を強めたり弱めたりする要因を探し出すことによって、より良い効率的なサポートを表現することに繋がります。博士論文では、発達障害児を養育中の母親ときょうだいを対象に質問紙調査を行いました。調査の結果、母親がきょうだいよりも発達障害児に注目せざるを得なかったり、きょうだいにも配慮しなければと思うと、気持ちの上で負担が増えることが明らかとなりました。きょうだいは、発達障害児から嫌なことをされると、発達障害児への否定的感情が増し、その結果きょうだい自身の不満足感の度合いも増すのですが、母親が自分に配慮してくれていると感じており、家族内の雰囲気がよく家族間のコミュニケーションがとれていると、家族に支えられて否定的感情や不満足感が軽くなることわかりました。



食事づくり行動に関連する要因の母子間の伝承に関する研究：家庭での食事経験と食事に関する認知に着目して (鎌田久子)

社会・経済の発展に伴うライフスタイルの変化とともに、家庭での食事づくりは変化しています。家庭で親が子どもに食事を準備し、子どもはその食事経験を通じて食習慣や食事マナーを身につけ、食事に対する価値観をもつようになり、親子の関係性もつられていきます。そこで博士課程では、家庭での母親の食事づくり

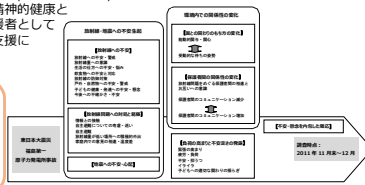


行動に関連する要因が、子どもに伝承されるかについて検討する研究を行いました。子どもの頃の食事経験によるクラス分析では3つのタイプが抽出され、母親の食事経験、食事づくり効力感などが、子どもの食事観、食事づくり効力感、食事づくり行動と関連することがわかりました。母親の食事づくり行動の背景にある食事観や食事づくり効力感等は、子どもの食事経験に影響し、さらにその食事経験は、子どもの両親との関係や将来の食事づくりのために重要であることを明らかにすることができました。

東日本大震災における福島第一原子力発電所事故後の母親および保育者の精神的健康と支援についての研究 (佐々木美恵)

東日本大震災、福島第一原子力発電所事故後、放射線による子どもへの健康影響の不安が生じました。福島で暮らすお母さんたちはそれぞれに考え、判断しながら、子どもを守り育ててきました。博士論文では、福島のお母さんたちの精神的健康と支援とともに、お母さんたちの身近な精神的健康と保育者に着目し、保育者の精神的健康と支援についても併せて検討しました。

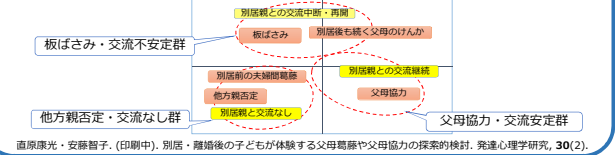
幼稚園教諭が感じた震災後の保護者の変化に基づいて、震災後の親の体験をモデルとして示しました。震災後初年度の経過のなかで、不安や混乱をはじめとした多様な様相を保護者が呈していたこと、それらを幼稚園教諭が丁寧に感じ取っていたことがわかります。



佐々木美恵. (2018). 放射線不安で幼稚園教諭が感じた保護者の変化についての質的検討. 心理臨床学研究, 36(4), 458-464.

離婚後の父母のコヘアレンティングと子どもの適応との関連に関する研究 (直原康光)

親の離婚を経験する子どもは、毎年20万人を超えています。親の離婚を子どもはどのように体験するのか、離婚後の親の心理的適応やコヘアレンティングに関心があります。修士論文では、子ども時代に親の離婚を経験した方に、半構造化面接を行い、コーレスポネンズ分析等により、子どもが体験する父母の葛藤や協力等は、大きく3群に分類されることを明らかにしました。今後は離婚後の父母のコヘアレンティングに関する量的研究を行う予定です。また、子どもと同居する親が、面会交流をどのように受け止めているのか、という観点からの研究も行っています。



直原康光・安藤智子. (印刷中). 別居・離婚後の子どもが体験する父母葛藤や父母協力の探求的検討. 発達心理学研究, 30(2).

指導した修士論文がジャーナルに掲載されました！

- 上野智江・安藤智子. (2017). 養育行動が幼児の行動と親の精神的健康に与える影響. カウンセリング研究, 54, 1-13.
- 田中美千子・安藤智子. (2017). 保健室と養護教諭が果たすアタッチメント機能：生徒の保健室来室行動と養護教諭の対応の探求的検討. 学校保健研究, 59(5), 354-366.
- 原涼子・堀口康太・安藤智子. (2015). 医療技術職の熟達プロセスに関する研究：視能訓練士を対象として. 医療の質・安全学会誌, 10(2), 160-171.

これまでに指導した修士論文のテーマ

- 家庭訪問における困難な経験を通じた行政保健師の成長プロセス
- 幼児の母親及び教師との関係性が家庭と園での行動に及ぼす影響
- ストレスチェック制度化による企業の取り組みを従業員はどうとらえるか
- 大学受験に対する親の態度が子どもの独立性に及ぼす影響
- 幼児期における養育行動が子どもの自己制御機能及び育児感情に与える影響
- セクシュアル・マイノリティの就労における困難
- 下級切迫者における義足生活への適応に関する研究

など、テーマは様々です。

担当授業：生涯発達臨床心理学 I カウンセリング方法論

胎生期から青年期までの心理社会的な発達課題や、それへの支援について
感情焦点化療法やAEDPなど感情や愛着理論を基にした体験的な心理療法の概説・演習

研究キーワード

養育者の抑うつ・周産期抑うつ
養育態度・子育て支援
アタッチメント
感情の社会化

主な著書

- 生活のなかの発達：現場主義の発達心理学 新曜社 2019
- 子育て支援の心理学：家庭・園・地域で育てる 有斐閣 2008
- アタッチメントの実践と応用：医療・福祉・教育・司法現場からの報告 誠信書房 2012

詳しくはカウンセリングコースの教員紹介をご覧ください。

